

＜令和6(2024)年産いちご主要病害虫の発生経過＞

育苗期は、全体的に病害虫がやや少ない～平年並みで推移しました。
本ぽにおいては、秋口の高温と少雨により、ハスモンヨトウの発生が多く確認されました。また春先の高温により、灰色かび病や、秋口にほ場内に侵入したアザミウマ類等の微小害虫の発生が多くなりました。

1 炭疽病

＜発生状況＞

6～12月はやや少ない～平年並の発生で推移しましたが、1月以降は平年並み～やや多い発生となりました。

＜防除対策＞

伝染を予防するため、水の跳ね返りのない方法でかん水を行いましょう。発生前から予防的な薬剤散布を行うとともに、発病株はほ場内外に放置せず、ポリ袋などで密封し、嫌氣的発酵処理をして処分しましう。

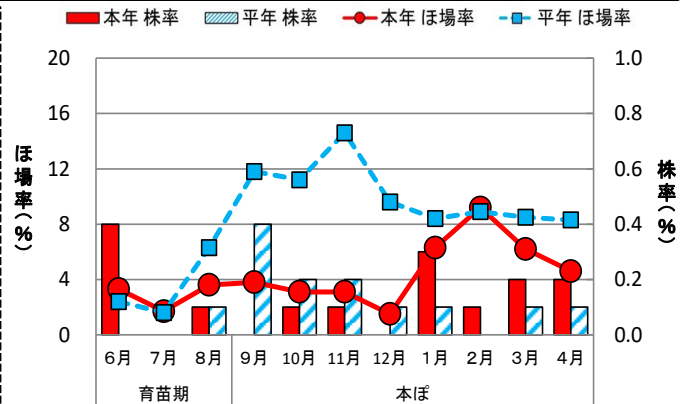


図1 炭疽病の発生ほ場率・株率

2 萎黄病

＜発生状況＞

全体的に平年より少ない発生でした。

＜防除対策＞

病原菌は土壤中で4～5年以上以上生存するため、本ぽで発生が確認されたほ場では土壌消毒を適切に行いましょう。

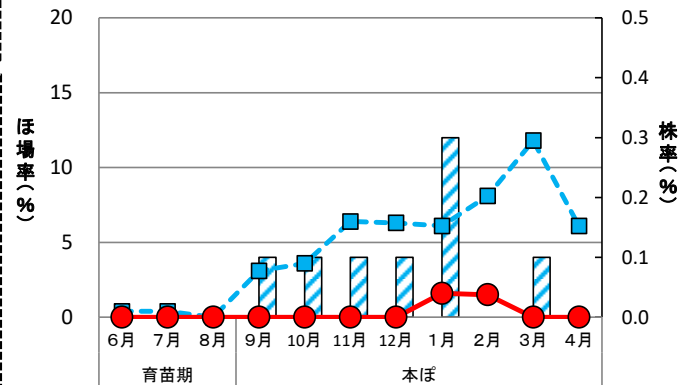


図2 萎黄病の発生ほ場率・株率

3 灰色かび病

＜発生状況＞

全体的に、少ない～平年並の発生でしたが、4月には発生が多くなりました。

＜防除対策＞

多湿条件において発生しやすいので、ハウス内が多湿にならないよう、かん水量や換気に注意するとともに、薬剤を丁寧に散布しましう。

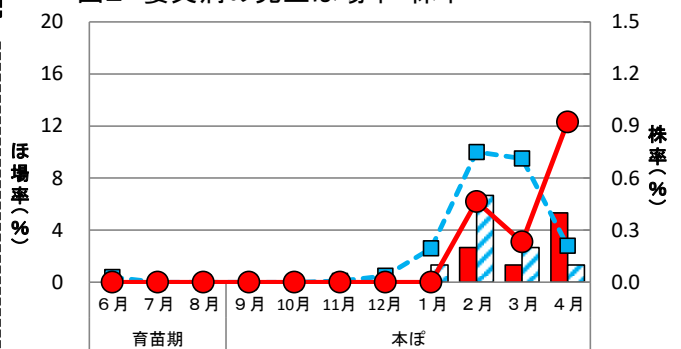


図3 灰色かび病の発生ほ場率・株率

4 うどんこ病

＜発生状況＞

育苗にはやや少なく推移し、本ぽでは、少ない～やや少ない発生となりました。

＜防除対策＞

育苗期の防除を徹底し、本ぽに病原菌を持ち込まないようにしましう。

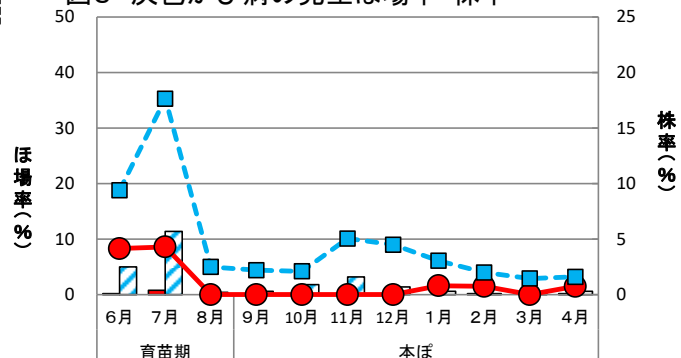


図4 うどんこ病の発生ほ場率・株率

5 ハダニ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られましたが、全体的にやや少ない～平年並の発生でした。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努め、天敵製剤（カブリダニ類）を使用する場合は、ハダニ類の発生前に放飼しましょう。

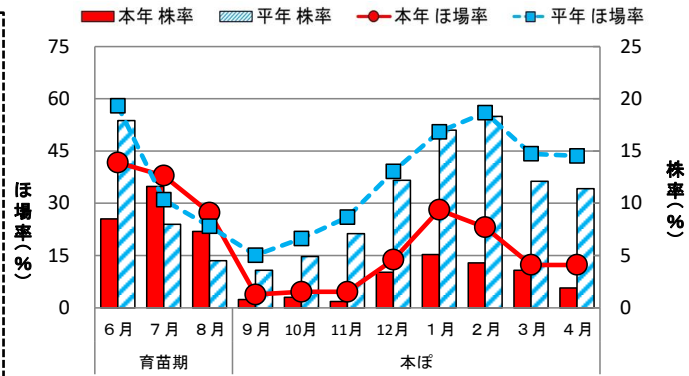


図5 ハダニ類の発生ほ場率・株率

6 ハスモンヨトウ

<発生状況>

本ぼでは10、11月に発生が多くなりました。

<防除対策>

幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、早期発見・早期防除に努めましょう。また、若齢幼虫が集団でいるうちに葉ごと摘み取り、処分しましょう。

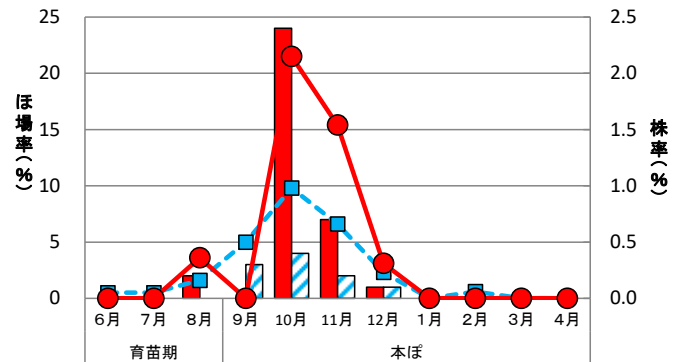


図6 ハスモンヨトウの発生ほ場率・株率

7 アブラムシ類

<発生状況>

育苗期から本ぼの栽培期間を通して発生が見られました。全体的に平年並～やや多い発生で推移し、4月には発生が多くなりました。

<防除対策>

早期発見・早期防除に努めるとともに、葉裏にも薬剤がよくかかるよう丁寧な薬剤散布を心がけましょう。

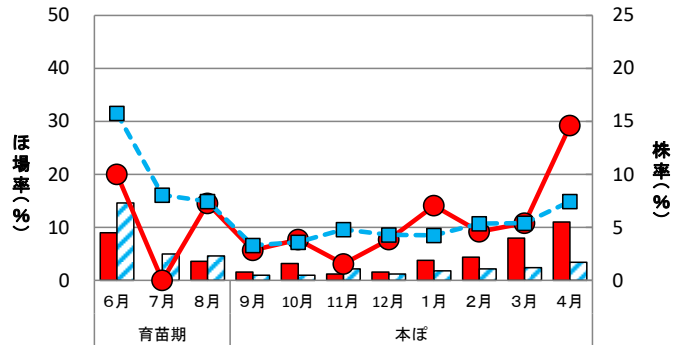


図7 アブラムシ類の発生ほ場率・株率

8 アザミウマ類

<発生状況>

11月から発生が確認され、12月にはやや多く、1月には多く推移し、4月には発生が多くなりました。

<防除対策>

開花初期にハウス外から侵入したアザミウマが多いと春先の発生につながることから、秋の防除を徹底しましょう。春期の飛び込みがあるので、適切に防除しましょう。

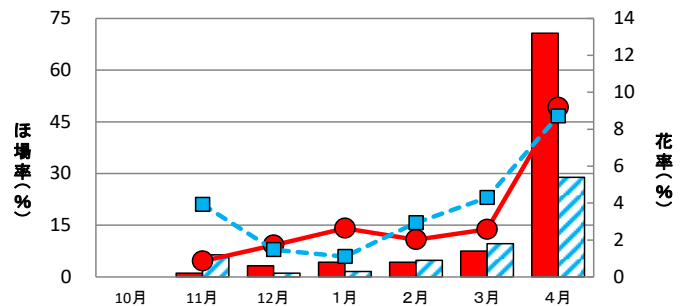


図8 アザミウマ類の発生ほ場率・花率

育苗期間中に病害虫防除を徹底し、本ぼへの持込みを防止しましょう。

■ 今月の防除ポイント

親株と本ぼの管理作業が重なる時期です。本ぼで発生している病害虫を親株に持ち込まないように、本ぼの管理作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。親株で病害虫の発生を確認した場合、速やかに防除し、苗や次作の本ぼへの持込みを防止しましょう。

－ 炭疽病 －

親株での発生は、被害が大きくなるため、防除対策を徹底しましょう。

1. 主に、6月下旬から9月下旬にかけて発生しますが、高温の時期に特に発生しやすくなります。
2. 頭上かん水は控え、できるだけ水の跳ね返りがないような株元かん水等を行いましょ。
3. 発病株は見つけしだい取り除き、肥料袋等に詰め、空気を排出口をしっかりと閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌氣的発酵処理を十分に行った後に処分しましょ。
4. 症状が出てからの防除は困難なので、発生前から定期的に予防散布を行いましょ。

－ ハダニ類 －

気温の上昇で発生が多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 本ぼで薬剤抵抗性を発達させたハダニ類を親株に持ち込まないために、本ぼ作業後に親株の管理作業を行わないようにしましょう。
2. 育苗期の薬剤散布にあたっては、収穫前使用日数の長いトクチオン乳剤（I:11B 収穫75日前まで）やアグリメック（I:6 親株育成期、育苗期）等を効果的に使用しましょ。
3. 雑草はハダニ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
4. 気門封鎖剤や天敵製剤を活用することで、作全体の化学農薬の散布回数を減らし薬剤感受性の低下を防ぎましょ。また、気門封鎖剤は5日程度の間隔をおき、複数回散布しましょ。

－ アブラムシ類 －

気温が高く、飛び込みが多くなる時期です！発生を認めたら防除を行いましょ！

1. 雑草はアブラムシ類の発生源になるので、ほ場内外の除草を徹底しましょ。
2. 施設栽培では開口部に防虫ネットを張り、アブラムシ類の侵入を防ぎましょ。

3. 発生初期から薬剤を散布しましょう。薬剤感受性の低下を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。